

このレポートは、IFA（国際肥料工業協会）が2025年2月に発表したIFAの短期展望プレゼンテーションおよびデータファイルの要約である。執筆者はIFAのマーケット情報部署の専門家グループである。

原文は英語で、下記のHPから直接にダウンロードすることができる。

https://www.fertilizer.org/wpcontent/uploads/2025/02/2024_ifa_short_term_outlook_report.pdf

IFAの短期肥料展望2024～2025

このレポートは、IFAのマーケットインテリジェンスサービスが作成したIFA会員専用の短期展望プレゼンテーションおよびデータファイルに付随するIFAの短期見通しレポートの公開要約である。

当該レポートの執筆者：

Laura Cross、ディレクター

Armelle Gruère、需用担当プログラムマネージャー

José de Sousa、供給担当プログラムマネージャー

Hanna Chtioui、りん酸と加里マーケットアナリスト

協力者：

Etienne Achard、肥料マーケットアナリスト

Grace Chilande、肥料需要アナリスト

Sylvie Marcel-Monnier、プロジェクトコーディネーター

注釈と定義：

本報告書における数量は、製品トンと養分トンで表されている。製品トンは当該製品の物理的重量を指し、養分トンは窒素、リン酸、加里肥料をそれぞれN、P₂O₅、K₂Oに換算された養分含有量を表す。N、P₂O₅、K₂Oに続くデータはすべて養分トンです。

窒素、リン酸、加里という用語は、世界中で生産・取引されているこれらの養分を含有する肥料を表すために使用される。なお、窒素、リン、加里は植物生育に必要な養分である。

年は、特に記載がない限り暦年を指すが、年度の前に「FY」が付いている場合は肥料年度を指す。肥料消費量の報告に使用される基準期間は国によって異なり、1月に始まる暦年で肥料消費量を統計する国があるが、別の月から始まる12ヶ月間の期間で肥料消費量を統計する国もある。

本レポートでは、「肥料年度」(FY)は12ヶ月の期間を指す。例えば、2022肥料年度は、ラテンアメリカ、アフリカ、東アジア、東南アジア、東ヨーロッパ・中央アジア(EECA)の

ほとんどの国では、2022年1月から始まる年を指す。北米、西ヨーロッパ・中央ヨーロッパ(WCE)、南アジアなどの地域では、2022肥料年度とは2022年第2四半期または年中から始まり、2023年第2四半期または年中まで終了する12ヶ月を指す。なお、肥料年度は、作付面積、収量、生産量に関する統計を報告する際に使用される作物販売年度と必ずしも一致しない。

免責声明

国際肥料工業協会(IFAI)が発行したレポートと資料は正確な情報とデータをもとに作成されよう努めている。ただし、IFAIとその会員はレポートと資料に記載されている情報とデータを一切保証するものではなく、そのレポートと資料により引き起こしかなる結果に対しても一切責任を負えない。

肥料市場見通しの背景

肥料市場の短期見通しは、急速に変化する世界情勢を背景に、世界的要因と地域的要因、そして業界固有のトレンドと製品間の横繋がりトレンドなどが複雑に絡み合っている。近年来、世界的な政治と経済、紛争や環境問題といった様々な要因が肥料市場に影響を与えており、全体の基調としてサプライチェーンとグローバルな統合は堅調に推移している。

2024年は、物理的な混乱、経済制裁、主要輸出国の保護主義的措置にもかかわらず、農家の肥料購入能力向上と貿易ルートの転換成功により、肥料需要は回復された。

その同時に世界の肥料事業は生産と流通コストの上昇に直面しており、継続的な金利上昇と企業運転資金の逼迫が続いている。プロジェクトファイナンスの課題に加え、政府優先事項の変化により、過去12ヶ月間に一部の脱炭素化の温暖化対策投資計画が減速または延期され、再生可能エネルギー発電能力の見通しにも影響を与えている。

2025年には地政学的状況は不透明な状態が続く。特にアメリカでは大統領交代が行われ、ドナルド・トランプ氏がアメリカの外交政策と世界的指導者地位を抜本的に変えようという強い信頼を得て当選したことが挙げられる。この動きはアメリカと中国、ロシアとの関係、そして低炭素投資への取り組みを通じて、肥料市場に大きな影響を与える可能性がある。

世界的な政治の変化にもかかわらず、主要国の政府は2024年にも農業と肥料に対して引き続き強力に支援していた。これによりサプライチェーンが支えられ、肥料需要の回復が促進された。その結果、2024年肥料市場の変動は過去数年よりもまたは他の商品と比較しても小さくなかった。

肥料の購入しやすさは、農家の施肥量を決める重要な要因であり続けているが、地域によって農家の信頼度には差があり、インドやラテンアメリカの農家は、ヨーロッパや北米の農家よりも農業所得の予想利益水準については楽観的である。

肥料供給予測

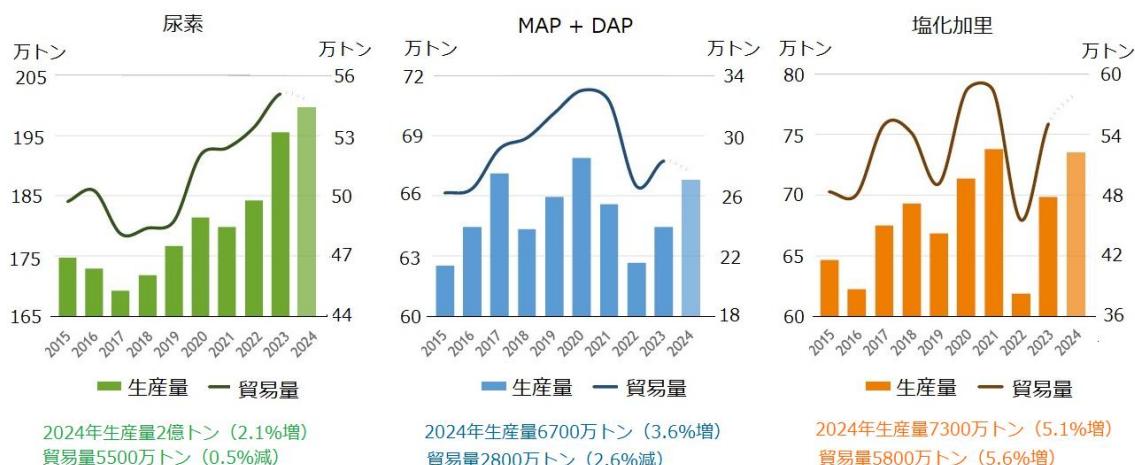
養分総生産量の増加傾向が維持される

IFA が 2024 年第 4 四半期に実施した短期供給調査の結果によれば、2024 年の世界アンモニア生産量は 2% 増の 1 億 8,980 万トンに達すると予測される。尿素生産量も 2% 増で、過去最高の 1 億 9,970 万トンに達すると予想される。2023 年と比較して、EECA（東ヨーロッパ・中央アジア）と南アジアを除くすべての地域は生産量の増加が見込まれて、特に西アジアが 100 万トン増、東アジアが 280 万トン増と予測され、中国が尿素生産量増加の牽引役となっている。

2024 年の世界リン酸生産量は 4% 増の 8,840 万トンに達すると予測され、りん安（MAP + DAP）生産量は前年比で 4% 増の 6,680 万トンとなる見込みである。ただし、世界の MAP + DAP 生産量は継続的な回復にもかかわらず、2020 年の水準までに回復する見込みがない。中国とモロッコが世界りん安生産量の成長を牽引し、2024 年にはそれぞれ 200 万トンと 110 万トンのりん安生産量の増加が見込まれる。西アジアと北米のりん安生産量は 2024 年より若干減少すると予想される。

世界の加里生産量は、ロシアの生産回復とラオスにおける新規供給量の継続的な増加に牽引され、2024 年には前年比で 5% 増の 7,350 万トンに達すると予想される。北米でもカナダの加里鉱山生産量の増加が見込まれている。

2024年生産量と貿易量の推定



窒素生産能力の伸びがけん引する一方、リン酸とカリ生産能力の伸びは鈍化している。

IFA の生産能力予測（通常の最大稼働率に基づく理論的な供給量）は、各国から発表された生産能力の増加に基づくものである。

アンモニア生産能力は 2023 年から 2025 年の間に 4% 増加し、2 億 700 万トン N に達すると予測される。窒素生産能力の伸びは、低コスト地域、すなわち天然ガスをベースとした建設中のプロジェクトがあるロシアと、税制優遇措置によりブルーアンモニア（発生した CO₂ を回収・貯留（CCS）により固定）への投資経済性が劇的に向上したアメリカを中心に伸びている。さらにイランと中国では、国内の肥料需要と工業用需要の増加に対応するために新たな生産設備の稼働開始が見込まれている。

IFA の予測では 2025 年末までに 130 万トン N のグリーンアンモニア（炭素フリーの再生可能エネルギーを使用して製造する）プロジェクトの稼働開始が見込まれる。また、グリーンアンモニアが持続可能な窒素源としての大きな可能性と水素キャリアとしてのエネルギー市場の機会を考慮して、将来的にはるかに大きな生産能力（2028 年までに 530 万トン N）が検討されている。

世界のリン酸生産能力は 2025 年に 6,510 万トン P₂O₅ に増加すると予測され、2023 年からわずか 1% の増加である。生産能力の増強は主に北アフリカで行われ、インドとブラジルでも小規模な増加が見込まれている。

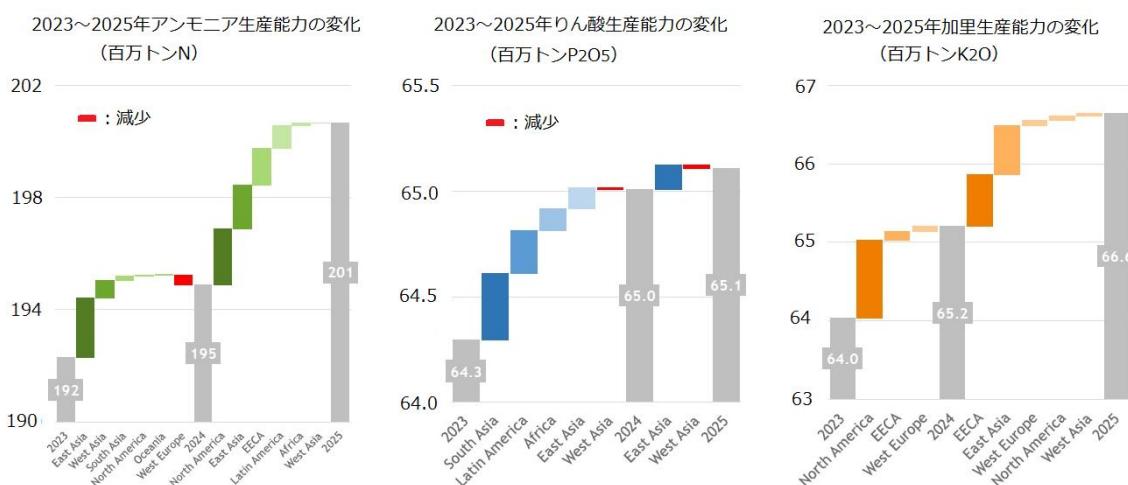
2025 年のカリ生産能力は 6,660 万トン K₂O に達し、2023 年より 4% の増加と予測される。ラオスの新規鉱山とロシアの既存鉱山の拡張がこの成長の大きな要因となり、カナダとスペインでも段階的な生産能力の増加が続くと予想される。

有効な生産能力は、上述の生産能力の拡大と政治・経済に混乱を生じた国々の生産量変動の組み合わせによって変化すると予想される。

- ・窒素の有効生産能力は、2023 年の 1 億 6,300 万トン N から 2025 年に 1 億 7,110 万トン N へと 5% の成長率で増加すると予測される。主な牽引役は、イラン、ロシア、アメリカにおける低コストプロジェクト、インドにおける輸入代替プラント、そしてグリーンアンモニアプラントを含む中国における生産能力の拡大サイクルである。

- ・リン酸塩有効生産能力は 2025 年に 5,530 万トン P₂O₅に増加し、2023 年より 2%の増加と予測される。生産能力の増加は主に北アフリカでの生産能力増強と、2023 年から 2025 年の間にブラジル、インド、中国で合計約 90 万トン P₂O₅の小規模新規プラントの稼働開始である。
- ・加里有効生産能力は、2023 年の 5,210 万トン K₂O から 2025 年に 5,440 万トン K₂O へと 4%の増加と予測される。2023 年には力強い回復が見込まれ（主にペラルーシとロシアの輸出能力の回復が主因）、稼働率も 2024 年と 2025 年も安定な水準を維持すると予想される。生産能力の増加は、主にロシアとラオスの既存生産者による生産能力の拡張によって牽引される。カナダとヨルダンの既存生産能力の小規模な拡張もあるが、その影響は比較的小さいと予想される。

2023～2025年世界各地域の生産能力増加または減少



肥料消費予測

IFA は世界の肥料消費量の約 90%を占める約 50 カ国 の専門家を対象とした調査に基づき、世界肥料需要見通しを作成する手法を採用している。また、この調査結果を元に、農業および貿易に関するデータ、そして最新の市場情報によって補完されている。

2025 年度には世界の肥料消費量が過去最高記録を超えると予想される。

世界の肥料使用量 ($N + P_2O_5 + K_2O$) は、2年連続で減少した後、2023 肥料年度に 4.3%、2024 肥料年度に 2.5%、2025 肥料年度に 2.2%増加すると予測される。2025 肥料年度の総消費量は 2 億 500 万トン養分量と予測されており、これは過去最高の 2020 肥料年度の 2 億 150 万トンを大幅に上回る。

世界的な肥料使用量の減少とその後の回復は、肥料の購入しやすさの大幅な変動が主な要因である。2021 年半ばから 2022 年半ばにかけて、世界の肥料価格の上昇幅はほとんどの農作物価格よりも大きく、肥料の購入しやすさが劇的に低下したことで、直接に肥料の購入量に影響を及ぼした。2022 年半ばから 2023 年半ばにかけては、その逆の傾向が見られ、肥料価格はほとんどの農作物価格よりも速いペースで下落し、その結果、肥料の購入しやすさと使用量が大幅に改善した。2023 年半ば以降、肥料の購入しやすさの変動は緩やかになっているが、養分間で大きな違いが現れている。加里肥料と窒素肥料の価格は農作物価格に比べて依然として魅力的である（特に油糧作物向けの加里肥料とコメ向けの窒素肥料）。一方、りん酸肥料については肥料価格の部分的な反発によりその購入しやすさがさらに低下した。

また、肥料消費量の回復は、肥料価格の低下、特に尿素などの窒素肥料に対する補助金など政府の施策によっても支えられている。

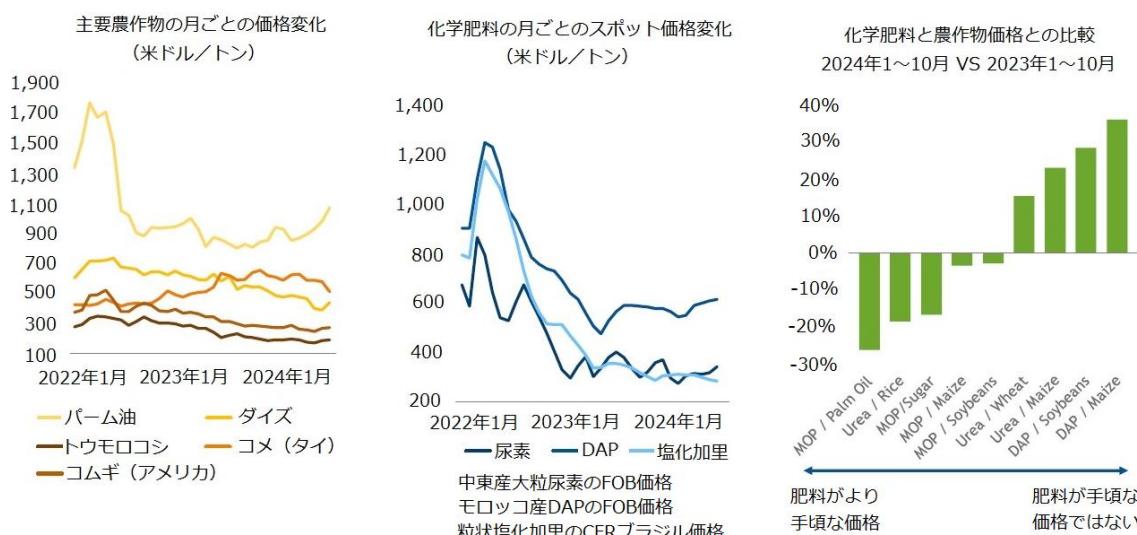
肥料消費量の変動は、肥料価格変動や製品ごとの政府支援の違いにより、肥料 3 要素に全体的に均等に広がっていない。

窒素肥料は作物の増収に不可欠であり、食料安全保障上の理由から一部国の政府から支援を受けているため、N 換算の消費量が 2021 肥料年度に 3%減少して 1 億 900 万トンとなつたが、2022 肥料年度に安定し、2023 肥料年度には 1 億 1,400 万トンに回復される見込みである。穀物の短期的成長にそれほど重要ではなく、政府による支援も少ないリン酸肥料と加里肥料の消費量は、窒素肥料より長期間にわたって大幅に減少した。 P_2O_5 換算のリン酸肥料消費量は 2021 肥料年度に 2.4%減少し、2022 肥料年度にさらに 7.4%減少して 4,420 万トンになった。 K_2O 換算の加里肥料消費量は 2021 肥料年度に 5%減少し、2022 肥料年度にさらに 10.7%減少して 3,430 万トンになった。その後、2023 肥料年度には 2 者とも力強い回復を見せた（それぞれ 4,660 万トンと 3,700 万トン）。しかし、2024 肥料

年度には価格の高騰によりりん酸肥料消費量の伸びが鈍化し（4,700万トンP₂O₅）、加里肥料消費量の伸びが加速する（3,960万トンK₂O）と予想される。2025肥料年度には、加里肥料消費量の伸びが鈍化し、りん酸肥料消費量の伸びが加速すると予想される。

2025肥料年度のN+P₂O₅+K₂O肥料消費量が過去最高と予測される。過去最高の2020肥料年度の記録と比較すると、世界の窒素肥料消費量は4%増の1億1,600万トンN、加里肥料消費量は1%増の4,100万トンK₂O、リン酸肥料消費量は2%減の4,800万トンP₂O₅になると予想される。

ほとんどの農作物価格低下の背景に、農家の加里肥料と窒素肥料の購入負担がりん酸肥料より軽い



アジア地域が肥料消費量の増加を牽引する

2023肥料年度から2025肥料年度にかけて、肥料消費量の増加は東アジア（26%増）が牽引し、南アジア（19%増）、ラテンアメリカ（19%増）、EECA（16%増）がそれに続くと予想される。東アジア地域では、K₂O消費量が48%伸びて、N消費量も19%増で大幅伸びたが、P₂O₅消費量の伸びは鈍化している。南アジア地域では、N（25%増）とP₂O₅（37%増）で肥料消費量の増加に大きく貢献している。東ヨーロッパ・中央アジア（EECA）地域では、N（20%増）とP₂O₅（23%増）で消費量の増加に重要な役割を果しており、K₂O消費量も8%増で貢献している。

窒素消費量の増加はアジアとEECAに集中している

2023 肥料年度から 2025 肥料年度にかけて 400 万トン窒素肥料消費量の増加が予測されるが、増加分の大部分はアジアとEECAが占めている。実際、窒素肥料の消費量上位 5 カ国として、インド（約 100 万トン増）、ロシア（約 50 万トン増）、中国、インドネシア、ウクライナは、世界全体の増加分の 54%を占めている。なお、上位 4 カ国は政府の公的支援により、ほとんどの農家が国際市場水準よりも低い価格で肥料入手することができる。

インドでは、政府は尿素の購入を強力に支援しており、最小小売価格（MRP）を国際価格よりはるかに低く、少なくともこの 10 年間は 45kgあたり 242 ルピー（約 2.82 ドル）、または 50kgあたり 268 ルピー（約 3.13 ドル）に据え置かれている。

中国では、新型コロナウイルス感染症危機後、穀物生産の停滞を受け、政府が食料安全保障目標を強化した。その結果、最近ではトウモロコシの栽培面積が拡大し、窒素肥料使用量が増加した。さらに、政府は 2021 年後半から尿素と MAP/DAP の輸出を規制することを通じて、国内肥料価格の上昇を抑制する政策を実施した。肥料利用効率を向上させる施策および国内政策の影響で窒素肥料消費量はこの数年間に減少していたが、2022 肥料年度から増加に転じ、2024 肥料年度も増加が続くと予想される。

インドネシアでは、政府はトウモロコシ栽培面積の拡大を奨励し、対象作物の小規模農家に尿素と NPK 化成肥料の補助金を支給している。2024 年には、補助金対象とする肥料数量を 470 万トンから 955 万トンに倍増させる予定である。これは国内肥料消費量の約 3 分の 2 に相当する。

ロシアでは、主要な肥料メーカーは 2022 年以降、肥料価格を固定するという政府の勧告に従っている。

東アジアのパーム油生産国が K₂O 使用量の回復を主導する

東アジアでは、2023 肥料年度から 2025 肥料年度にかけて世界全体の K₂O 消費量増加分（10%増）の半分を占めると予測される。増加分の 54%がパーム油生産国、30%が中国

で、残りはほかの東南アジア地域が占めている。また、北東アジアの一部の国では、K₂O消費量が若干減少すると予想される。

パーム油生産国（インドネシアとマレーシア）は、2024年にパーム油価格の上昇と塩化カリウム価格の下落により恩恵を受けた。これにより、K₂O消費量は34%（80万トン）増加すると予想される。インドネシアのアブラヤシ栽培地域におけるゴムノキ栽培への転換に伴い、K₂O消費量の増加は鈍化しているが、2025肥料年度にも緩やかではあるものの、引き続き増加すると予想される。

ラテンアメリカでは、価格の高騰により2024肥料年度にP₂O₅消費量が減少する

世界のP₂O₅使用量は、2024肥料年度に緩やかに増加する（0.8%増）と見込まれている。WCE地域およびEECA地域での消費量増加は、ラテンアメリカ、オセアニア、東アジアでの減少により、部分的に相殺されると見込まれている。消費量の最も大きな減少はラテンアメリカ地域と予測される。ラテンアメリカの農家は東アジアのパーム油生産者が2024年に経験した状況とは逆の状況に直面している。大豆価格は下落する一方でMAP価格は上昇し、大豆にリン酸肥料の施用に経済的な負担が増えた。ブラジルで消費されるP₂O₅の約3分の2は通常大豆畑に施用されるため、経済的な負担の増加がりん酸肥料の総使用量の減少を引き起こした。ブラジルのP₂O₅使用量の10～15%以上を占めるトウモロコシへの施用についても同様の状況が発生している。さらに、エルニーニョ現象が一因となった乾燥した気候がブラジルのマットグロッソ州の大豆作物に影響を与えて、作付面積の拡大にもかかわらず、大豆生産量は前年比で6%減少すると見込まれている。

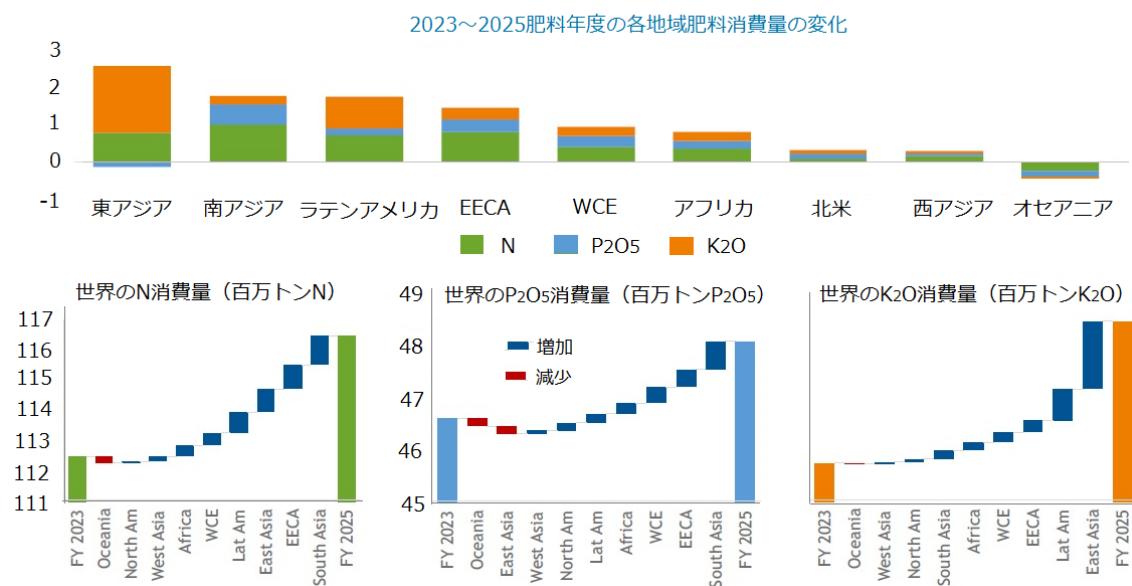
EECAとアフリカの肥料消費量が最も急速に増加すると予測される

東アジアは短期的に世界の肥料消費量の増加を牽引しているが、EECAとアフリカは2023肥料年度から2025肥料年度にかけて肥料消費量がそれぞれ15%と11%の増加を遂げ、最も活発な地域市場になると予想される。

ウクライナでは、戦争の勃発により2022肥料年度の肥料消費量が70%も（280万トンから90万トンに）減少したが、2023肥料年度には150万トンまで部分回復し、2024肥

料年度には 170 万トン、2025 肥料年度には 180 万トンまで増加が続くと予想される。しかし、これは 2017 肥料年度から 2021 肥料年度までの年間平均 260 万トン消費量より低い水準である。ロシアでは、肥料使用量は 2022 肥料年度に大幅増加（22% 増の 530 万トンに）し、2023 肥料年度には天候の問題により 480 万トンに減少したが、2024 肥料年度と 2025 肥料年度には堅調に増加すると予想される。全体としては、EECA の肥料消費量は 2025 肥料年度に 1,130 万トンに達し、2020 肥料年度と同レベルに回復されると予想される。

東アジア地域が肥料消費量、特に加里消費量の回復をけん引する



アフリカでは、成熟した北アフリカ市場よりも、サハラ以南アフリカ（SSA）地域で肥料消費量の大幅な増加が見込まれている。特に K₂O は堅調な伸びを示し、エチオピアにおける NPS（NP 硫黄化成肥料）から DAP への切り替えが予想されるため、2025 肥料年度には P₂O₅ も堅調な伸びを示すと予想される。